

中北.com

地域教育情報紙

中北教育事務所
地域教育支援スタッフ

no.
3

TEL 0551-23-3046

FAX 0551-23-3013

チュウホクドットコム

中北の地域社会 (COMmunity) の心の交流 (COMmunication) をめざします

「山県大貳」を活かした地域づくりへの取り組み ～紙芝居制作から活用まで～



7月31日(火)、県立青少年センターで「社会教育指導者研修会(第2回)」が開催され、公民館活動の実践発表がありました。中北管内では、甲斐市の取り組みとして、敷島公民館の岡田みどり氏と竜王北部公民館の雨宮由紀子氏から、「『山県大貳』を活かした地域づくりへの取り組み～紙芝居制作から活用まで～」と題した活動が紹介されました。郷土が生んだ偉大な学者である山県大貳の存在・業績を市民に周知することで、人づくり・地域づくりに役立てようと、この紙芝居の制作が始まった

そうです。この紙芝居は、平成23年度から地域の児童館・いきいきサロン・公民館などで繰り返し上演されており、山県大貳の知名度・理解度アップに大きく貢献しているようです。テレビのような一方通行のメディアとは違って、語り手と観客との双方向性を備えた紙芝居に着目した点が素晴らしいと感じました。市民に地元の偉人を知ってもらうことで、地域愛や地域を誇りに思う気持ちを育むこの取り組みは、地域をさらに活性化していくでしょう。



せいか音楽祭 ～2018夏音～

100人の吹奏楽！合奏大作戦 甲斐清和高校



8月25日(土)、甲府市にある甲斐清和高校で、同校音楽科主催の「せいか音楽祭～2018夏音～」が開催されました。今年、初開催となるこの音楽祭には、「街角に音楽を」のコンセプトのもと、興味深い様々なプログラムが用意されていましたが、そのフィナーレを飾ったのが「100人の吹奏楽！合奏大作戦」でした。これは、一般の方を対象に演奏者を募って行われた「参加型コンサート」で、演奏希望者は各自で楽器や譜面台を持参しました。本番に向けた準備として、今回は山梨県内で活動するプロ楽団YWP(山梨ウインドフィルハーモニック)のメンバーによるパート別講習が行われました。そして、合奏練習を経て、いよいよ本番。一般の演奏参加者(小学校低学年児童から60代の楽器愛好家まで)が120名、それにYWPメンバーを加えた、総勢160名による迫力の大合奏となりました。オープニングは行進曲の定番『ワシントン・ポスト』、続いて、軽快なリズムの『名探偵コナンのテーマ』、クライマックスはポップスの名曲『宝島』、そして、アンコール曲『マンボ』で会場の盛り上がりは最高潮に達しました。聴き手も手拍子や掛け声で演奏に「参加」すると、ホール全体が心地よい一体感に包まれました。演奏者と聴衆の距離が限りなく近づくことが「参加型コンサート」の醍醐味の一つであると実感しました。



JICA出前講座

「世界とわたしたち ～SDGsを通して考える～」 須玉小学校

【世界に目を向ける】

台風一過の9月5日、北杜市立須玉小学校の6年生を対象に、「JICA出前講座」が行われました。子どもたちの笑顔に迎えられ、講師のオードラン 萌 氏（JICA山梨デスク国際協力推進員）は教室に入ると、開口一番“Bonjour!”と挨拶し、そのまま流暢なフランス語（ご主人はフランス人）で自己紹介を続けました。耳慣れない言葉に子どもたちは既に興味津々の様子です。同氏は、青年海外協力隊の一員として中米のニカラグア（公用語はスペイン語）に派遣され、小学校教諭として活動した経験があり、今度はスペイン語で語りかけました。こうして、子どもたちの目を外国へと向けながら、『世界とわたしたち～注1 SDGsを通して考える～』と題した講座が始まりました。



注1 SDGs : Sustainable Development Goals 「持続可能な開発目標」

【世界が抱える課題】

「水道から水を飲んだことがありますか?」、「病気の時、病院に行ったことはありますか?」…冒頭、このような質問が子どもたちに投げかけられました。日本ではごく当たり前のことであっても、それが当たり前ではない国（開発途上国）が世界には存在し、その数は世界の国々のおよそ8割を占めているということに、子どもたちは先ず大きなショックを受けた様子でした。そして、日本もかつては世界の人々の力を借りて開発途上国から先進国の仲間入りを果たすことができたという経緯が語られると、今度は日本が開発途上国に「注2 恩送り」する番であることに子どもたちは気づきました。更に、約30年後の人口爆発を例に、このまま世界の人口が増え続けるとどんなことが起こるか?という質問が投げかけられました。子どもたちからは、「土地が足りなくなるので、他の星に住むようになる」、「化石燃料が足りなくなるので、ワインが代替燃料になる」…など、単に「～が足りなくなる」という段階に留まらず、それを補うものが新たに出てくるといった一歩踏み込んだ意見が多く出されたことが印象的でした。



注2 恩送り：受けた恩をその相手に返す「恩返し」とは異なり、受けた恩を別の人に送ること。恩を送られた人は、その恩をまた別の人へ送るといった好循環が生まれる

【17個のSDGsと「ファストファッション」】

上記のように、現在、あるいは、未来の世界が抱える課題を浮き彫りにしながら、いよいよ、本題へと入って行きました。あのピコ太郎さんとJICAが共同制作したプロモーションビデオの画像と共に、世界を変えるための17個のSDGsが紹介されました。まず始めに、世界の諸課題の解決に、これら17個の目標がどう結びついていくのかが、「注3 ファストファッション」を例に解説されました。バングラデシュの首都ダッカ近郊のビル崩落により明らかになった劣悪な労働環境、安価で消費サイクルが早い衣料品の大量廃棄、繊維工場が排出する有害化学物質によってもたらされる環境破壊などが「ファストファッション」の課題として指摘されました。ここで子どもたちが気づいたのは、世界の課題は「ひとつずつ」ではなく、課題同士が複雑に絡み合っているということ、したがって、ひとつの目標に向かって取り組むことで、それに関わる違う目標も達成できるということでした。続いて、「ファストファッション」



「ファストファッション」

に関して、自分たちが取り組めることが何かないかと問われ、子どもたちからは「流行に流されず、服を最後まで着る」、「着なくなった服を誰かにあげる、リサイクルに出す」、「要らなくなった服を使って、食器洗いの前の皿の油とりに使う」など、建設的な意見が寄せられました。また、講師自身が実践していることとして、「注4 フェアトレードの商品を購入する」、「自分の服に着いているタグを確認し、その国について考える、調べる」などが紹介されました。

注3 ファストファッション：最新の流行を採り入れながら低価格に押さえた衣料品を、短いサイクルで世界的に大量生産・販売するファッションブランドやその業態

注4 フェアトレード：開発途上国の原料や製品を適正な価格で継続的に購入することにより、立場の弱い開発途上国の生産者や労働者の生活改善と自立を目指す貿易の仕組み

【身近な課題解決が世界の課題解決へ】

続いて、17個の目標に対する「日本の達成度」が分かる図が示されました。日本は156カ国中15位で、昨年より順位を4つ落としているという結果に触れ、その要因として、漁業資源の管理の甘さ、気候変動対策への取り組みの遅さ、女性国会議員の少なさや男女の給与格差などが指摘されました。中でも特に達成度が低かった目標5：「ジェンダー平等を実現しよう」について、日本とニカラグアの取り組み状況が紹介されました。日本の注5 ジェンダーギャップ指数は世界144カ国中、114位と低迷しているのに対し、ニカラグアは6位という高い順位を獲得したという結果が示されました。このことから、SDGsは、先進国、途上国に関係なく、世界のすべての国々で、すべての人々が取り組むべき目標として定められていることに子どもたちは気づきました。続いて、身近なところに目を移し、自分たちの学校・学級の課題解決が、世界の課題解決につながることも学びました。例えば、世界で不足する食料は年間320万トン、それに対し、日本の食べ残しはその約2倍の630万トン…給食を残す人が多いという課題を解決することが、SDGsの目標2：「飢餓をゼロに」につながり、更に、これ以外の目標（例えば目標14：「海の豊かさを守ろう」）につながっていくことにも子どもたちは気づきました。



注5 ジェンダーギャップ指数：「健康と生存率」、「教育」、「経済活動への参加と機会」、「政治への参加」の4つの領域で、男女間の格差がどれくらいあるかを示す

【世界の課題を「人ごと」から「自分ごと」へ】

終わりに、同氏は、「わたしたちにできることってなんだろう？」と子どもたちに問いかけ、結びとして、今日ここで学んだことを家族、友人、地域の人に広めてほしいと訴えました。

最後の意見発表の中で、「須玉町のことを調べたりしながら、須玉の課題を解決することが世界につながればいいなと思った」という意見が子どもたちから出されました。グローバル（グローバルな視点でローカルに行動を起こす）な視点からこのような意見が出されたことに、同氏は大いに感銘を受けていました。



同氏はこのような啓発活動を通じて、「世界と自分たちの生活はつながっていることを知ってもらい、世界の課題を『人ごと』ではなく『自分ごと』としてとらえることができる大人や子どもたちが増えてほしい」と熱く語っていました。子どもたちが世界の様々な課題と真摯に向き合い、仲間と共に知恵を絞り、解決策を見出そうと一生懸命取り組んでいる姿に、私たち大人も負けてはいけなさと背中を押された気持ちでした。



秋の夜長…「燈火親しむべし」

秋も深まりつつある今日この頃、「秋」という言葉から「食欲の秋」や「スポーツの秋」のみならず、「読書の秋」を連想する方も多いのではないのでしょうか。そこで今号では、「読書」を話題として取り上げてみました。



「読書の秋」

毎年、10月27日～11月9日（「文化の日」を挟んだ前後2週間）が「読書週間」であることはお馴染みですが、そもそもなぜ「読書」は「秋」なのでしょう。唐代の文人である韓愈（かんゆ）が息子の符（ふ）に勉学を勧めるために詠んだ漢詩「符読書城南」が「読書の秋」のヒントになっているようです。原詩は「時秋積雨霽，新涼入郊墟，燈火稍可親，簡編可卷舒」となっており、概要は、「秋になって涼しくなったので、燈火の下で書物をひもとくにはよい時期であろう」といった感じです。文豪夏目漱石が明治41年に朝日新聞に連載した『三四郎』の中にも「燈火親しむべし」というフレーズが登場しますが、これが「秋は読書の季節に相応しい」という認識を日本人に広めたとも言われています。

「家読(うちどく)」のススメ

全国各地で広まりつつある「家読(うちどく)」活動。本県の社会教育課でも、県教委が推進する「しなやかな心の育成推進事業」の一環として、「家読」推進運動に積極的に取り組んでいます。この運動の生みの親である佐川二亮氏(家読推進プロジェクト代表)は、その誕生の背景について、「時代は少子化と電子メディアの急激な進化に子どもの生活と家族の実態も大きく変貌した。子どもは家庭に帰れば自分の部屋に籠って電子ゲームやインターネット、携帯メールに夢中。家族との団欒がなくなり会話が疎遠になったことから少年事件が著しく増加傾向にある。子どもが関わる事件の背景には家族のコミュニケーション不足が主な要因にある。子どもと家族がもっと話し合う場はどうすればできるのか。この命題が『家読』という家族ふれあい読書で誕生した」と語っています。また、その効用について、「家読はコミュニケーションを図る場であり、子どもたちの思いや素晴らしさを知り、発見する場でもあり、私たち親の考えを子どもたちに伝えることのできる大切な時間だと思えます」と述べています。皆様も、この「家読」をきっかけに、家族のコミュニケーションをより豊かなものにしてはいかがでしょうか。[佐川氏の言葉は、東京都教育委員会のHPより引用]



「ビブリオバトルやまなし2018」

本県における読書活動の推進を図る「やまなし読書活動促進事業」の一環として実施される「ビブリオバトルやまなし2018」(主催:山梨県教育委員会 やまなし読書活動促進事業実行委員会)をご紹介します。これは、「バトル」と呼ばれる発表者たちが、おもしろいと思う本の魅力を5分間で紹介し合い、「読みたくなった」と思った聴衆の投票数で勝敗を決めるものです。「ビブリオ」は「本」の意味で、「戦い」の「バトル」と合成した言葉で、知的書評合戦ともいわれています。実施日時は12月9日(日)13:00～、会場は山梨県立図書館2階多目的ホール(注意:ポスターには「1階イベントスペース」とありますが変更になりました!)、参加対象は中学生以上(観覧参加は小学生以上)、参加申込締切は10月29日(月)となっています。また、『チャンプ本』の紹介者は全国大会へ招待されます。詳細については、山梨県教育委員会社会教育課のHPで確認していただきたいです。生徒の皆様も、大好きな本の魅力を分かち合う仲間を見つけて、幸せな気分になってみませんか。是非、奮ってご応募ください。



平成30年度 『中北.com』 No.3
編集・発行 中北教育事務所 地域教育支援
スタッフ 深澤 隆二・伊藤 哲也
〒407-0024 韮崎市本町4-2-4

電話 0551-23-3046
Fax 0551-23-3013
カラー版は中北教育事務所のHPでご覧になれます
<http://www.pref.yamanashi.jp/kyoiku-ch/>